

東ネパールにおけるラマ教儀礼

酒主照之

古くから北のチベット文化と南のヒンズー文化の影響をうけてきたネパールには、それぞれ異なつた言語・文化を有するいろいろな民族が雜居している。その中で東ネパールの北部山地には、チベット系住民であるシエルバ族が生活を営んでいる。彼らはラマ教を奉じ、その文化もチベット文化圏に属するものである。

この東ネパール北部山地を中心として、昭和四十六年一月より翌年一月まで、その周辺を踏査する機会を得た。そして東部第二地区のロールワリンでは、五月から十月にかけての約五ヵ月間、シエルバ族の集落に定住し、彼らと生活を共にして、民俗・宗教等について調査することができた。ここでは、その間に出会つた宗教行事を主に、ロールワリンの東に位置するクンブ地方、その南のソル地方との差異も考慮しつつ、彼らの宗教儀礼の一端を紹介する。

東ネパール・シエルバ圏に点在するラマ教のゴンパ(Dgon-pa)はチベット人による新しいゴンパを除けば、すべてニンマ派に属していると言つても過言ではない。ニンマ派の各ゴンパには、主にサンダ・チョンゴンギョー(Sans-rgyas Bcom-ldan-giig)とチエールシー(Spyan-ras-gzigs)‘そしてパドマ・ジュンネー(Pad-ma hbyun-gnas)が安置されてゐるのが普通である。なかでもニンマ派の派祖と仰ぐパドマ・ジュンネーすなわちパドマ・サンバヴァ

(Padma-Sambhava)の尊像は、必ずと言つていいほどゴンパのどこかに配されている。ロールワリンのゴンパにも、その正面に以上の三体が安置されていた。恒例の行事はほとんどすべて、このゴンパの中で行なわれる。

ロールワリンのゴンパにおける恒例の行事としては、一月に行なわれる新年のモラム(Smon-lam)‘四月のニンネ(smyun-gnas)‘六月四日のチエールゴルコル(chos-ikhor-skor)‘九月二十二日のハバトウジエン(tha-bab-dus-chen)がその主なものである。他に一月の中旬には、ソル・クンブ地方にニンマ派を広めたサンガ・ドルジ(Sang-ha-dor-je)の供養祭が行なわれ、八月の七日から九日までの三日間、ヒンズーのダサイン(Dasain)すなわちドゥルガー・プージャー(Durga-Puja)と時を同じくして、一種の供養祭が行なわれている。また、この辺一帯のゴンパでは、毎月あるいは一年のうちの幾月か、上弦月の十日に供養祭を営んでいる。ロールワリンでは年に一・二度しか行なわれないが、下弦月の十日に同様な供養祭を毎月行なつてゐる所もある。

ロールワリンにおいて現に行なわれている宗教行事を概説したが、ここでその中のニンネ(斎戒)の行事をとりあげ、少し詳しく説明してみる。これは、ロールワリンの他に、ソル・クンブ地方でも行なわれている。

ニンネの行事は四月の十四日から十六日にかけての三日間行なわれる。その目的は、行事に加つた人々が罪を贖い、善根を積むことにある。村人は行事を遂行するため、毎年三名のラワ(Lawa)を任命する。これは輪番制になつてゐる。ラワの役目は儀礼に必要な灯明の燃料を用意すること、儀礼での助法をつとめるために他の

村からやつて来たラマたちを接待し、彼らに謝礼を与えること、およびゴンパで供養される食物と飲物を用意することである。

第一日の朝、関係者はゴンパに集まり、ラマは儀式書に則つて儀式を進める。クンプ地方ではこの間、チュルテン (mchod-ten) やマニ (mani) を巡行するところもある。第一日は長時間にわたる祈願が行なわれる。そして、この祈りの合間に、僧も俗も額を床にすりつけて、礼拝を繰り返す。彼らは自身を罪人として描き、一切の苦から離脱するように祈る。チュレレーシーを礼拝し、彼らの身体と心がチュレレーシーと一体となるように念じる。すべての罪果より逃れるためには、彼ら自身がチュレレーシーと一体とならねばならないとの考えに立つている。

第二日は齋戒の日である。終日、ゴンパに留まり、祈りが続けられる。この日は祈りを誦する以外、言葉を発してはいけない。

翌朝、齋戒を終わり、礼拝を終わつて、彼らは一旦自宅に帰る。そして、ニンネに参加しなかつた他の多くの村人と共にゴンパに集まる。この日は上弦月の十日に行なわれる供養祭のときのように、本尊下の扉が開かれ、そこには悪魔を追い払う儀式に使われるトルマー (Gor-ra) が並ぶ。その前には、前日に用意された奉納品の食物が並べられている。笛・太鼓・鈴・シンバルが入つた短い儀式が行なわれた後、奉納品の食物が集まつた村人全員に施与される。これで三日間にわたるニンネの行事は終わる。

この行事は既にチベットで行なわれていた。すなわち、チベットでは四月十五日を釈尊の成道・涅槃の日と定めて祭日にしており、四月は肉食を断ち、善根を積むべき月とされてきたことが指摘されている。ロールワリンでは、それにならつて、四月十五日にニン

ネを行なつていられるものと考えられる。これに対し、ソル・クンプ地方のゴンパでは、一般に六月に行なわれ、行事の起源についても独自の伝説をもつている。しかし、ロールワリンとソル・クンプ地方の間で行事内容・目的等にそれほど差異は認められない。

ニンネの他に、六月四日のチュール・ゴル、九月二十二日のハバ・トゥー・ジュンもその起源はチベットに求めることができる。チベットでは六月四日を釈尊の初転法輪の日に相当するとして、祭日にしており、九月二十二日は釈尊が兜率天から降つた兜率下生の日とされていた。

ここに述べたロールワリンにおける行事のほとんどは、ソル・クンプ地方でも行なわれている。ソル・クンプ地方には、他に五月から七月にかけての安居など、ゴンパの規模の小さいロールワリンには見られない行事がある。また、ニンネの行事ひとつをとつても、ある程度の地域差が認められることも事実である。そして、これまで述べてきたように、東ネパールのラマ教儀礼の主なものには、チベットに由来するものが多く、しかも釈尊にゆかりのあるものが多いということは、注目すべきことである。

- 1 以下はすべてシュルパの暦法による。一月は太陽暦の大体三月に相当する。
- 2 C. von Furer-Haimendorf: *The Sherpas of Nepal*; *Buddhist Highlanders*, pp. 180~185. 参照。
- 3 D. Snellgrove: *Buddhist Himalaya*, pp. 248~262. 参照。
- 4 多田等観『チベット』五六頁。
- 5 C. von Furer-Haimendorf: *op. cit.* p. 181.
- 6 多田、前掲書、五七頁。